

別府
土直

以てゆき枝折

東海道人述

小序

豐之山水甲關西。第一誇人耶馬溪。光景



吾曲。浮嵐暖翠把詩題。是東海道人別府雜詩之

也。別府濱湧瀕于海。所在溫泉不下數十所。蓋

鶴見岳泉脈之所注。是以斥鹵湯蒸。汀沙泉湧。可

以坐。可以浴。何唯臙脂紅粉之溫柔。可弄而已。竹

田翁。豐之善畫者也。每意匠經營。遂不描做浮嵐

暖翠之圖。其或然矣。其云描之者。不知畫者也。古

人謂。詩不盡言。畫不盡意。而高人韵士。能片言隻

語盡之。吁。不知文章之至味者。不可共談斯境之
光景也。癸巳春抄東海道人書以弁于別府土苴
之首云。

いてゆの枝折 一名別府土苴

東海道人云



抑此の別府町は豊後の國速見郡の一都邑にして豊前より肥後路に
出る所の官道にありたり。大分縣廳を距ること僅かに三里。郵便電信局
警察署學校等の設けありて。戸數は千餘。人口は四千に餘れり。東南。瀨
浦灣に面せたる良港あり。舟楫の便利は言ふまでもなく。鶴見岳の
ふもとに傍ふて。扇山。石垣原。觀海寺などいふ名區に據り。濱脇に联接
して海汀には一面に温泉を噴出せり。山海の空氣を吸呼して。其清鮮
なること。暑を避る。共に上乘の地と云ふへし。十二名勝あり。
其は道人か詩引を後に載せられたるこゝに贅せず。港上より望めば。佐
賀の關。笑の崎と左右相對峙して灣をなし。左から鏡面の如く。此距

離は海程凡そ十里許あり。伊豫の山々は、適かに杳渺の中をわけて、一
髮の青を送り、其風景明媚とやいはん。筆に載するとも、辭に述ぶべく
もあらず。灣に沿ふの都邑は、佐賀關、鶴崎、大分、濱臨、別府、豊岡、日出、杵築
等にて沿岸は、凡そ十八九里と云。灣の形ち蓮の花に似たるかゆへに、
古來より齒落灣とは稱せしとぞ。

今茲の春、道人西游の途次、聊か恙ありて、此の温泉よ浴治せんとて、四
國より渡航し、是の永年泉館に滯留せること、殆ど三閱月ありき。日々
浴後には、近郊に散策して、地理はもとより、温泉、澡浴の模様にいたる
まで、粗ろの要領を得たりければ、之を記して、家つとにも、また來浴の
人々の、之をりにもとて、筆を把らんとせしが、その冒頭に、こゝの館
のあらましをも認めて、大方に紹介せんと爲せり。扱、此の永年泉館は、
瀛船問屋を兼ね、港上にて著名の逆旅あり。主人は日名子姓にて、名を

太郎といふ。五六年以前、新たに別室を構造し、専ら清潔にして、攝生に
適するを旨とせしむは、遠近の來客は、多く此館に集む參り、いや増繁
昌することゝあれり。館の内に、三坐の温泉あり、新湯、沙湯、元湯といふ。
泉質はみち、炭酸性にて無臭透明あり。特に新湯は、此館新築のとき、發
掘せしものにて、硫素を含有せり。温度は攝氏の四十五度内外にて、頗
る適度なり。具原先生が豊國紀行に、民家の宅中に温泉十所あり、何れ
もきよし。庄屋の宅中にあるは、殊にきよしと云へる。庄屋の湯と
は、即ち此の沙湯にてありとぞ。温泉古記に云、往古、日子泊瀬邊とい
へる人、日子の亞、傳より仙訣を傳へて、豊州の處々に、温泉を創む。其後
ち養老天平の年間、別府に温泉を設くと云ことあり。其由來久きかり
き。明治廿一年の一月に、有栖川陸軍大將の宮、熊本鎮臺御檢閲の道す
から、此館に御立寄ありて、此の温泉に臨浴し給ひ。こゝより軍艦金剛

に召させられ。御歸京ありしと云。其とし六月。西村知縣は。僚属に命し。泉質を分折し。効用を詳記して。管内に公布せしめたり。翌年。内務省より。長與衛生局長の巡視ありし時。此の新湯に澡浴して。大に其効用を讚し。即ち永年泉とは名つけたるあり。道人もまた記文を撰みて。後昆に貽すへき由を述べたり。此館の構造は。専ら保養攝生を主とするもの。されは。貴顯紳士より。淑女貴夫人。又は文人雅客。及び卓隸輿擡までも。適宜游浴を得るの便利を示して。間敷は大小數十あり。通常の宿泊にも。木賃逗留にもあれ。唯其意に任せつへし。浴場は館内に三坐もあれは。雜踏の弊なく。晝夜朝夕。澡浴意の如くならざるはなし。又外湯いづれの湯に入浴するも。別に湯錢湯札の煩もなし。園庭は爽敞にして。山烟疊雲。朝昏に代謝し。青山の樹を排して入り來るなんと。養病の爲には。頗る適中ありと云ふへし。是れろの大略を記すのみ。其他に旅館

は許多あるへけれど。こゝには泄しぬ。

此地。温泉の數は。枚擧するに。遑あらず。其著るしきものを。左に掲ぐ。別府には。楠湯。新湯。不老の湯。野田の湯。高札場の湯。朝見の湯等あり。又港口に。新築せし砂湯あり。靈潮泉と稱す。潮水盈るときは。浴するを得ず。潮汐盈虚のたひ毎に。温泉を洗淨し。爲に塩分を包含して。痼疾には尤妙とす。何れも。浴室は石盤にて槽を分てり。また旅亭の内湯には。噴泉或は引湯あるありて。近時漁船交通の便利あるより。京都大坂は。言ふまでもなく。其外遠近の地方より來浴するもの。日々多く。一ヶ年中の浴客は。この別府のみよても。凡そ十萬餘人には。はれりと云。その他は。濱脇に。西の湯。東の湯あり。觀海寺。堀田。鐵輪。龜川。柴石。明礬等の湯。遠きも壹里餘に過ぎす。近きは五六町の間にて。中就。鐵輪には。海地獄といふて。熱湯の沸騰する大池あり。また泥塗の噴湧する土田ありて。浴後

の散歩には運動を兼ねて尤もよろし。十二勝は。うれの近きところ。又は途すからにあれば。半肩一瓢。雅游の清興も。又淺うらさるへし。永年泉館温泉。定量分析成績。及醫治効用。(廿一年六月大分縣布達よ由る)は左の如し。

元湯。泉質炭酸泉。本泉の性状は。無色透明よして。稍澁飲性の酸味を有し其反應は。酸性にして。煮沸すまは。亞兒加里性を呈し。二「リール」中。〇、七四二五瓦馬の固形分を含有し。千分中より檢出せる各成分。及其量。左の如し。

硫酸伽留母	〇、〇一七四〇	硫酸那篤留母	〇、〇一五二六
硫酸加爾叟母	〇、〇一三六〇	格魯兒那篤留母	〇、〇一六四一六
重碳酸那篤留母	〇、一六四一六	重碳酸加爾叟母	〇、四一四八〇
重碳酸亞酸化鐵	〇、〇〇三二八	硅酸	〇、二〇六〇二

硼酸 痕迹	磷酸 痕迹	有機物 痕迹	合計	〇、五二五二〇
遊離炭酸	〇、二二五〇〇	硫化水素	痕迹	

○醫治効用

- 慢性筋及關節痲質斯痛すじにくよりふしくのいたむやまい
- 痛風よくふうのうしにむやまい
- 炎症後の滲出物よびくのこりかたまり
- 神經機能の亢進しんけいのたかよしたるもの
- 神經痲痹しんけいのしびれやまい
- 婦人生殖器の慢性諸病ふじんしきぶのながひくやまい
- 貧血ちのすくみやまい
- 重病後の恢復期たいびやくあがりのなをり
- 腺病るいれび
- 膀胱及腎臟慢性炎したはらのいたむやまい
- 疝痛せんきうのいたみ
- 頑癬あせりにくしみせんのあせ

新湯泉質。炭酸性含硫泉。本泉の性状は。無色透明にして。硫化水素の臭氣を放ち。初め稍酸味にして。後收斂し。其反應は。酸性よまて煮沸す

これは亞兒加里性を呈し、「リール」中。一、〇〇二五瓦馬の固形分を含
有す。千分中より検出せる各成分及其量左の如し。

硫酸加留母	〇、〇〇四七〇	硫酸那篤留母	〇、〇五二五一
格魯兒那篤留母	〇、一五六八三	重碳酸那篤留母	〇、一五九九八
重碳酸加爾叟母	〇、二九七一〇	重碳酸麻僱涅叟母	〇、二三〇〇四
重碳酸亞酸化鐵	〇、〇一一七八	硅酸	〇、一八七三三
礬土	〇、〇〇七二〇	硼酸	痕迹
有機物	僅少	合計	一、一〇七四七
遊離炭酸	〇、〇二六二〇	硫化水素	〇、〇一九〇〇

○醫治効用。元湯に同一なるも、含硫泉あるを以て、かんぞうのやまいじのやまいよるせ肝臟病、痔疾、陳舊性
かきのあし梅毒等にも適應すへし。
入浴する人の心得は左の如し。

一 遠來の患者、疲勞したる時は、暫時休息して、然る後ち、入浴すへし。決
して頓に入るへららす。

一 最初の一週間は、一日二回、爾後は三回とし、入浴は十分間より、二十
分間を過すへからす。

一 虚弱なる患者、及び老人小兒等は、初より數回入浴すへからす。又は
長湯することあかれ。

一 入浴中は、何人に限らす。あるへく靜にすへし。大聲。又は湯の中を潜
りなど爲さへからす。

一 飲食をあしたる後、或は空腹ある時、又は疲勞甚しき時等は、暫く見
合せて入浴すへし。

一 湯治中は、大酒暴飲を慎しむ。又飲食後は必ず散步をあし。決して直
に臥牀に就くへからす。

一風雨。又は寒冷の節杯は。薄衣のまゝにて。空氣に觸るへうらす。外邪に胃さるゝの憂あり。

一惡寒若くは。發熱頭痛。又は眩暈等の事ある時は。必ず。其の快愈を待て。後ち。入浴をさすへし。

一入湯したる後。たとひ發汗するおとあるとも。其衣服を脱して。邪氣に觸るへからず。

一固有の持病。發生するが如き氣味あるを覺ゆる時に於ては。決して入浴を爲すへからず。

一種々の病症に因て。入湯の効害は。宜しく醫師に聽たる上湯治すへし。濫りに入湯すへからず。

以上

本地の物産は。大概左の如し。

縫針。團扇。竹簾。鮑屑織。雨合羽。川茸。海苔。煎鮓。生姜。芽生姜。酢漬。海參。ひらす。鱒。煙草。入。青筵。花筵。紙類。金銀細工。下駄。釣針。鯉の鹽辛。篠竹。簾。傘。櫛。かね下。朝見陶器。菓子類あり。就中。輕便にして。浴客の歸遣となすへきものは。先づ竹簾。縫針。芽生姜。酢漬。鮑屑織物の類あり。

本港よりは。大坂。神戸。高松。多度津。今治。新居濱。三津。長濱。及ひ八幡濱。宇和嶋。其他。佐賀ノ關。臼杵。佐伯。延岡。細嶋。行の汽船。毎日の發着ありて。郵便電信局は。小包郵便をも取扱へり。而して。其海陸の里程は。大概左の如し。本港より海上は。大坂の百三十二里。神戸の百二十二里。高松の九十二里。多度津の七十八里。今治の五十六里。三津の四十二里。長濱の三十四里。八幡濱の二十八里。宇和島の三十八里。細嶋の六十里あり。陸路は。熊本に三十四里。小倉に三十一里。日田の豆田に二十里。耶馬溪に十六里。人力車の佐伯に十九里。竹田に十四里。佐賀關に十里。臼杵に十里。

中津の十七里半。宇佐官幣大社宇佐八幡宮の十二里。杵築の七里。日出之三里半。鶴崎の五里。大分之三里あり。人力車は、大抵一里五錢とす。汽船賃は、一定す可らすと云とも。平均、大概壹里壹錢位の準則あり。近古、騷人韵士の來浴するもの、詩歌許多あるが中に就て、古人の詩句一二を左に抄出して、その材料に供せんとす。

早起浴温泉

脇 園室名長之小浦人

起曙曉色闌。東方海色生。步履涉苦徑。臨發試湯泓。和暖適我體。澄潔何盈々。濯浴自呼快。將息或倚楹。不知患痾宿。正覺身肢輕。松際丹霞抹。漸見群山明。

觀海寺朝望

同

觀海靈場望壯哉。丹霞碧浪接天開。香烟靜逸温泉窟。旭影遙浮凝露臺。浴詠自同曾點志。賦篇誰逐子虛才。身凭石檻千尋上。月送雲帆萬里回。

浴温泉

毛利 空桑名倫鶴崎人

日携童子去。遙蕩浴温泉。樵伐陰陽嶺。農耕水陸田。夾蹊幽石少。埋里白雲連。未必嘗丹藥。家人骨共仙。

石垣原

三浦 梅園名繁人

山圍舊國鬱嵒嶮。遺蹟空原鍊半銷。鬼哭夜隨風雨起。冤魂秋入海濤嘶。分爭霸略指揮失。割鯨雄圖形勢遙。烈士憤前停杖立。歲寒松老草蕭蕭。

周覽湯池

田能村竹田名孝憲岡人

小杓斜通柳。淺灣輕屣臨。水牛開關。誰識脂粉女兒巷。却看倪家春雨山。

別府竹枝二首

全

恰遇春江花月夜。一絃一撥寄相思。翠娥不動聲將絕。消盡儂魂是此時。羅列黃金十二鈔。餘生托跡亦知佳。春水綠波橋白板。或思此地似秦淮。

石垣原懷古

李 紫 溟 熊本人

豐山行盡見平原。亂石縱橫古塞垣。鐵騎不歸春寂々。杜鵑聲裡吊英魂。

別府

廣 瀨 淡 窓名建日田人

樓上離歌歇。江頭欵乃新。歸舟回首處。猶見倚欄人。

寄懷別府矢田子朴

全

別府風光好。東游我昔經。爲留支遁室。不到子雲亭。山暝湯烟白。洲晴石氣青。遙思高隱處。清誦防疎櫺。

由布山

全

宿鶻縱晴由布分。北風空翠落紛紛。路過半腹無青艸。天近層標有白雲。未了色從周海見。不孤名與富山聞。同邦每恨佳緣少。傾蓋今朝始遇君。

別府襟咏

長 梅 外允文日田人

街市斜通水一方。海棠花發夜風香。北樓歌起南樓睡。不識春思孰短長。流川

分手依々未忍行。橋頭曉色若爲情。東風不使別離絕。折盡柳絲還復生。車橋潮退風暄落。日斜海汀一帶也繁華。浴沙人臥半身出。恰似春泥著落花。沙湯

別府即興

富岡 耿 介名散明小城人

扼山又控海。別府不虛名。三日南豐酒。溫泉始洗醒。

別府阻雨

長與 松 香名專野大村人

江村春晝雨濛々。料峭衣寒簾外風。澡浴洒然清徹骨。萬愁消盡一杯中。

別府十二勝詩并引

東海 道人

癸巳首春。吾西游。發病別府永年泉館。一日館主日名子東。籬指示十二勝。請余詩。居數日。浴後散策。逍遙近郊。粗探勝槩。隨得隨錄。得詩十二首。繫以小題。聊以供同好游資云。

朝見清流

朝見川發源於鶴見嶺東流過朝見八幡祠前爲別府濱湧之界而注乎海。祠宇森蔚老樹插天。建久年中大友氏所創祀也。川流見底。清可瀨齒。水煖沙明白。蘋紅。菱四時不絕。最美於香魚。初春魚兒落罟。如我墨水。白小魚。又有經年盈尺之物。供下物更妙。

流水潺湲欲卜居桃花暖處上香魚。朝看浮爾度山半。正是騷人得句初。宇都宮達山曰。真個南豐風土記。讀至白小魚。想東京昨游。不覺食指搖矣。

小栗布岳曰。撲毘卜居于此川上。朝暮對實景。未得一句。先生一囑已道破。

八疊靈石

八疊石。一稱神樂石。瀕于四極山。山大友氏所據。距濱湧數百武。平敷海面。石上可容十數人。春夏之交。天晴氣爽。雲浴波穩。扁舟載美。

斫。脰。擊。鮮。石。上。圓。坐。道。人。之。鐵。笛。先。生。之。醉。金。興。復。不。淺。

春樹迢々幾曲灣。布帆明滅盡圖開。海天爲我設虛席。八疊巨巖波捲山。

達山曰。設虛席三字。尋常詞人所不能言。不得不爲道人讓八席也。波捲山三字。尤覺有力。

又曰。大友氏累世據府內城。在今大分縣治南數十町。大友氏距城數里。四面置砦。連珠環繞。以備不虞。四極山亦其一也。八疊石。一號神樂石。歲時大旱。奉柞原神社行幸石上。奏樂以祈雨。故有此名也。凡地有高山。則其海必深。四極山下。海深百尋。遂灣中最深處。吾輩朝夕漁釣所熟知也。故海底產珊瑚樹。昔年別府人。小舟載妓遊石上。飲酒娛樂。將歸倉黃。舉錨。百方不拔。有一人取金比羅神符。盛竹筒中。錘而墜之。錨忽拔起。操引甚重。極力操引。已近舫。則錨爪鉤大枯樹而來。舟人曰。枯樹鉤錨可惡矣。槌擊而沈之。小枝細折在舟中者。皆是純然珊瑚樹也。翌早復往投網。

探之遂不能得云。

布岳曰。豪爽雄偉。與大友諸將對峙。

濱海浴沙

別府浴海。溫液湧於潮中。浴客候潮水之退。烘背熨腰。穿沙蕪身。頗妙於痼疾。凡溫泉所在之地。所未曾有。是其所以為別府耶。

沿海聯櫂數百家。境稱別府也。繁華此間。多少。養痾客。不浴溫泉。浴煖沙。

達山曰。實境可掬。○春後少煖。張雨傘坐臥于其下。余嘗有奏皇坑儒生之句。

布岳曰。實景人未道得。溫泉古記中。曰。朱灘湯。曰。登呂湯。蓋朱灘與沙。發呂湯與泥。邦音相通。是此地。濱海斥鹵。到處湧出溫泉。浴客烘背熨腰。是亦他邦所絕無。

港口曉景

別府港。東南面。東西百間。南北八十間。係于明治三年之新築。凡潮水之盈。蓋深四十丈。可以容巨艦大船。故上去來之船。出入輻輳。漁笛之聲。晝夜不斷。

港口。縱橫通阡。陌阡。到處湧溫泉。樓招西北。去來客。門泊東南。上下船。

達山曰。實境藹然。○自杜工部奪胎來。而不見痕迹。別府竹枝中。未見其比。

布岳曰。好紀行。

觀海晚眺

觀海寺。在南立石村。境以據山腹。眺望極佳。尤可於澡浴。有溫泉而懸焉。浴後。舉杯悠然。一囑。遠則。余山透迤。髣乎。送一髮之青。近則。陽城箕岬。與嵯峨之關。相對在左。視右。願之間。蒼波白帆。鷺浴鴉翻。光景滿前。應接不遑。使人有天地何其寥濶。胸襟何其洗滌之槩。

觀海一樓高聳空。陽城箕岬入眸雄。豫山髣髴送遙碧。欄外春輕萬里風。
逢山曰送遙碧三字句切。一吟使人仙仙乎。有脫風塵之想。

塔原瀑布

音原。或云御塔原。吉祥寺觀世音堂側。有大友氏時之塔焉。瀑布沿
鶴嶺之麓而下。水迸石激。翠樹欲流。或從樹抄流來。或自溪邊吐出。
千仞之素練如從鶴背飛落來耳。下流稱雌瀧。幽靜有致。盛夏洗暑
最宜。四顧溪山。卷畫此景。不應空擬。坐覺數年塵土。肺腸但為淨洗。
鶴嶺排空勢欲吞。波間時見遠山奔。忽驚脚下虬螭降。萬丈飛流是塔原。

的浦夕陽

的濱相傳。久壽年中。鎮西八郎耀威於九州也。據九疊山之南麓。溝
武於此地。因稱的濱。其或然矣。青松白沙竹樹雲石。雞犬迥聞。大有
野趣。意自悠然。

夕陽欲沒射山扉。想見八郎踞處磯。弦月初升的濱上。知伸臂力奮餘威。

逢山曰。意匠慘愴。字句激切。足以併見八郎餘威。感服敬服。

又云。一矢之長三五雄。五人彎勢一張弓。餘威尙駭的汀浪。道是當年猿
臂公。拜吟激昂。老夫不覺奮興志氣。忽得一絕。所謂狂詩者。幸恕老爺狂
態。

布岳曰。弦月字下得的切。

石垣夜雨

扇山之東。鶴嶺之裔。曠原平野。石樹亂立。寶相寺之山峙於北。立石
山在其南。慶長中大友義統黑田如水爭雄之地。大友家士。吉弘統
幸以下八十餘人忠戰。孤墳在焉。至今風雨晦冥之夜。猶聞白骨泣
青鬼哭之聲。

曠野茫茫沙磧平。群雄用武迹崢嶸。沈才折戟未銷盡。夜雨蕭々鬼哭聲。

逖山曰。詩與引正確明。使人起懷古之情。有韓退之兵車行之餘意。
布岳曰。哭鬼定是吉弘。試下一轉語曰。石垣漫莫吟斯句。或恐啾々來迫
人。

流川花柳

流川。或稱名殘川。卽惆悵惜別之意。妓館駢宇。樓榭溫柔。境湧溫泉。
便仙妃浴靈液。使人魂銷眼狂。白足禪僧思收道。青袍御史擬拋官。
者在焉。竹田翁詩。或思此地似秦淮。吁。商女唱。恨烟月籠沙。而誰爲
多情。杜樊川者。

樓々呼快。繡簾中。最是流川名不空。醉月歌。花春若海。柳絲吹動。雨絲風。

逖山曰。秦淮曲溫雅流暢。有揚誠齋之風。使田翁聞之。必拊舞于地下。將
謂流川果有解此詩意名妓否。

布岳曰。敗道拋官。何特白足青袍而已。○樊川問情。不能無感。

扇山煖翠

扇山。在鶴見山之東麓。形如扇兒之倒懸。昔時有土崩之變。毀隕左
骨。山容秀眉。自有雲烟縹渺之致。

忽濃忽淡。幾辱顏。爲暗爲明。溽又溽。光景如描。人欲喚。微風扇出一崦山。

布岳曰。扇字妙。

鶴嶺浮嵐

鶴見岳。舊稱火山。溫泉從此山湧出。別府濱湧。賣浴生活。往古此山
鳴動。經日不止。人心洶々。當時朝廷發勅使。授以從五位。下朝散太
夫。既而鳴動始止。本邦古來往々有此等之事。令民人知朝廷之尊
嚴者。不亦偉乎。

落日。夙帆飛。鳥還。海天烟沒。佐加關。地蒸火氣。冬猶煖。高潔。冲雲鶴見山。
布岳曰。始皇封松。衛公爵鶴。不過一時之愛耳。本朝封山。爵鶴。永垂天威。

其事雖似。其蹟則天壤不啻也。我輩臣民宜記憶。

布岳晴雪

油布岳。一名木綿。邦訓相同。古稱湯岳。又有豐後富士。筑紫富士等名。東面鶴見岳。南對四極山。平家山在其背。於三山圍繞之中。特擁扇。小鹿之諸山而峙立。一望杳然。芳嶺冲霄。白雪掩頂。酷肖富嶽。所以有小芙蓉之稱也。

木綿山上白雲封。三十六洋呈遠容。還訝嶽蓮然。突兀豐南一望小芙蓉。

達山曰。布山雲霧幾重封。海似開前齒。齒容三伏雪。融應初見。排空八朶玉芙蓉。拜讀一過。驚詩律之妙。且想像客歲東海觀嶽之勝。詩思頓發。妄攀高韻。卒爾遣興。蕪雜之甚。非敢闕巧也。

布岳曰。油布岳。為我豐第一等高山也。三十六洋舟中遙望。則諸山如兒孫。第二句更妙。

湫	敬	淮	目	墳	石	暴	就	樹	儼	正
瀨	明	准	月	墳	古	食	中	巒	擡	誤
十六	十五	十三	十二	十二	十二	九	五	四	四	頁
三	三	十二	十二	六	四	十二	十一	十一	六	行
楊	戈	講	陌	蓋	登	沿	吟	淡	僕	正
揚	才	講	陌	蓋	發	浴	金	浴	撲	誤
廿二	廿一	二十	十九	十九	十八	十八	十七	十六	十六	頁
十	十二	十	四	二	九	四	一	十二	八	行

明治廿七年四月三十日印刷

明治廿七年六月五日發行

著者

綿引泰

發行者

日名子太郎

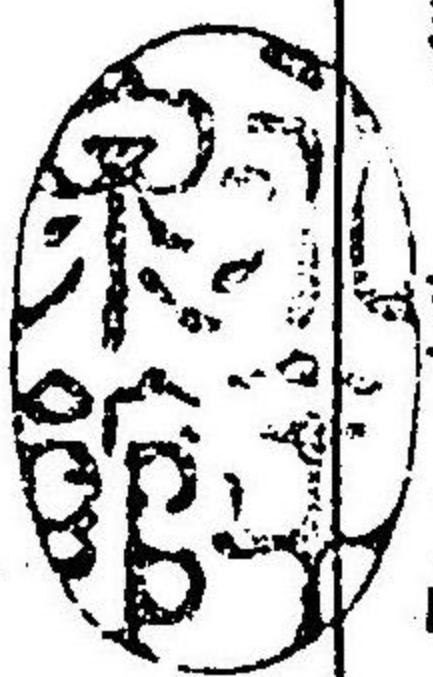
印刷者

梅田平次郎

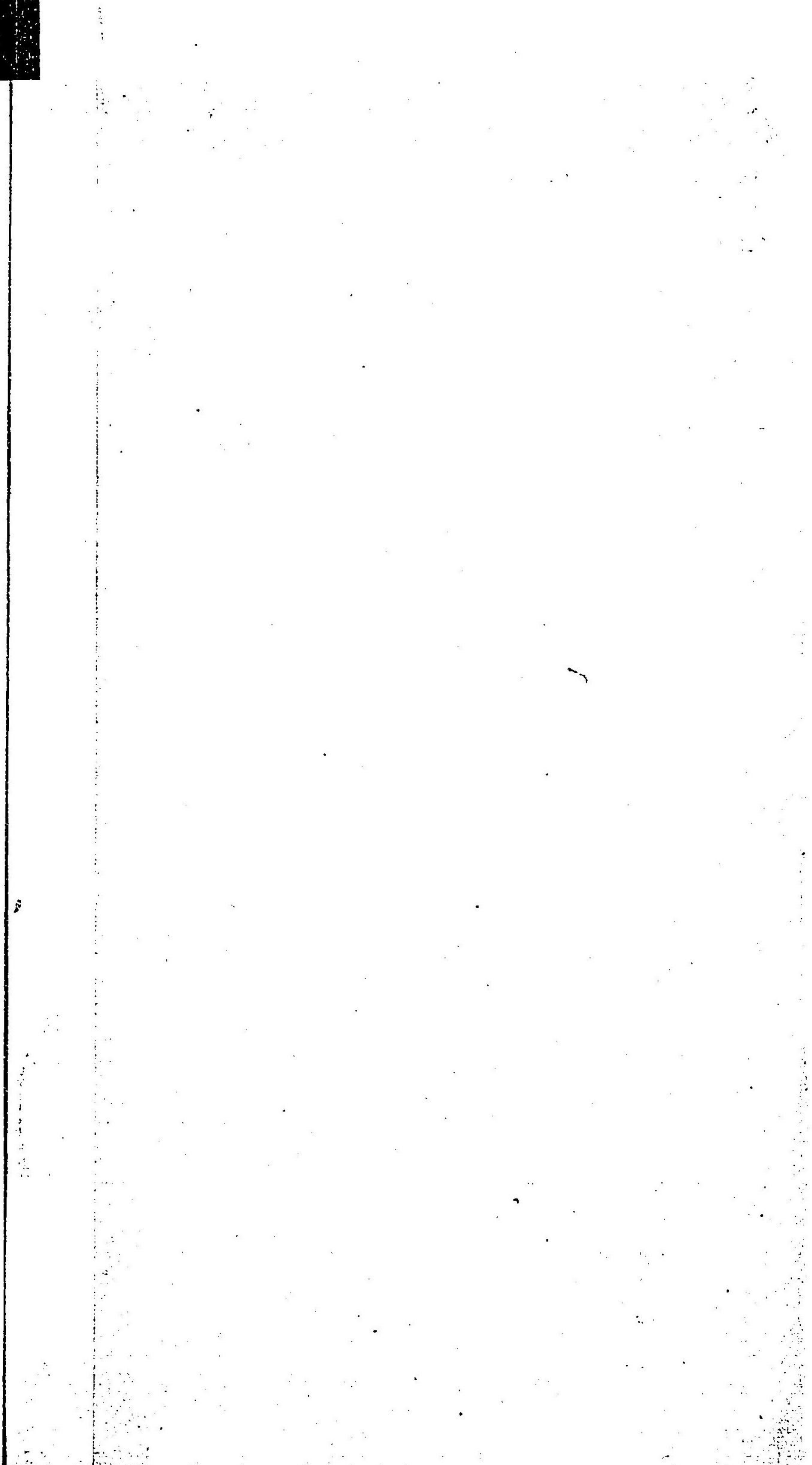
熊本縣熊本市手取本
町十一番地

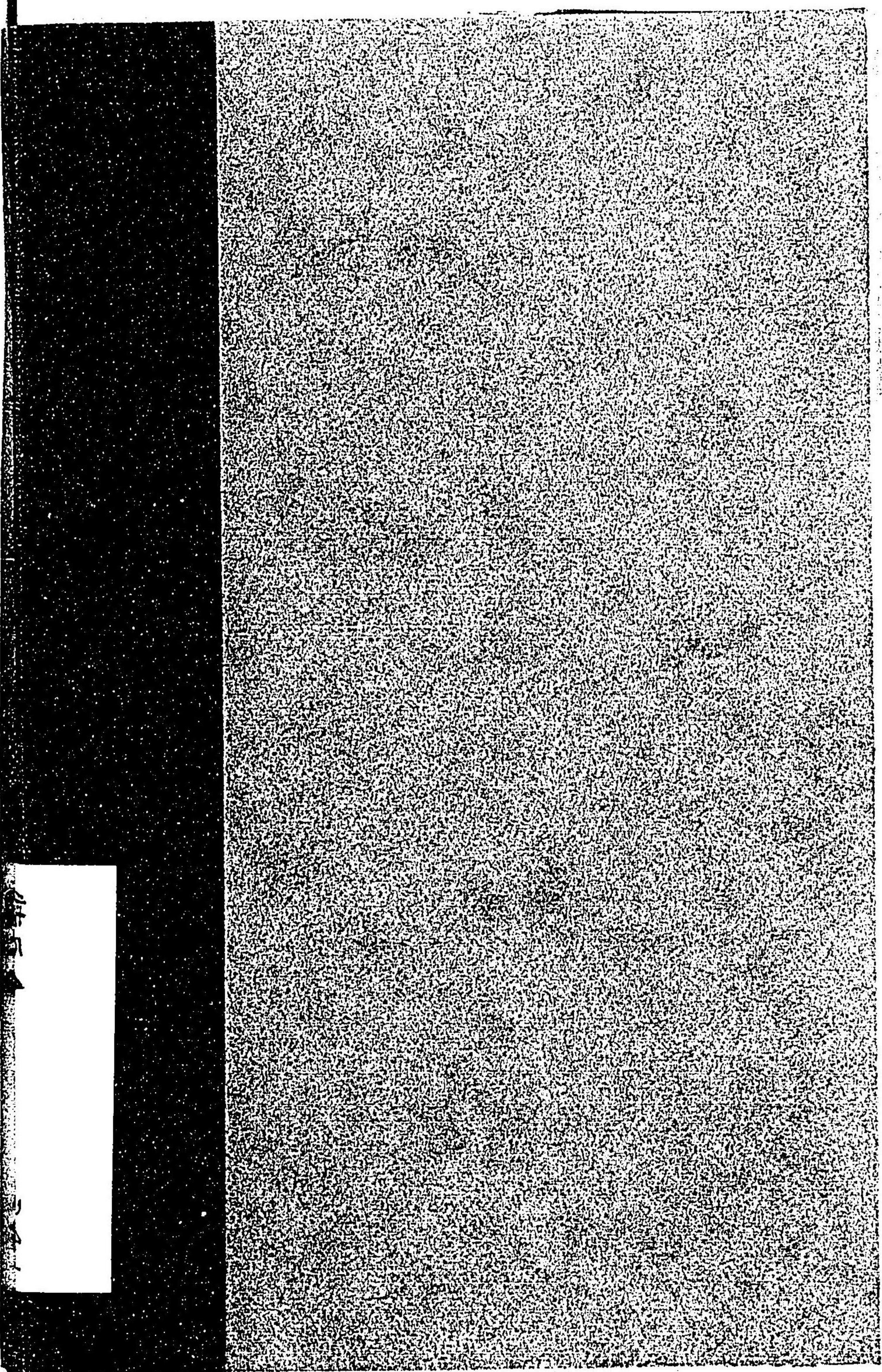
大分縣速見郡別府町
二百六十四番地

東京本郷元町二丁目
三十九番地



非賣品





特54

241

いでゆの枝折

国立国会図書館

026137-000-1

特54-241

いでゆの枝折 一名, 別府土産

綿引 泰(東海道人) / 著

M27

ADC-3808

